

特集 はたらくということ

●出典：「育てる」通巻第152号 昭和56（1981）年2月25日発行

人間の成長とお手伝いのもつ意味

——少年時代の思い出から——

召田 照明（八王子市立第九小学校 校長）

私は、信州の山村に農家の二男として生まれました。家は古くから続いた旧家で、農業のほうもかなり手広く営み、稲作と養蚕業が主でした。ですから、小さい時からよく手伝いをしたものです。確か私が小学校の頃だったと記憶していますが、「蚕のまゆ」の個人生産額が長野県下第二位ということで、知事から感謝状をいただいたといつて、父が大変喜んでいたのを覚えています。

そんな養蚕農家でしたから、人手がとても必要でした。家族も、祖父母、父母、兄姉と総勢十二名もいた時もありました。それに加えて、手伝いの方がいつも数名いましたので、春から夏にかけては、一大家族集団が、広い家の中に住んでいたのです。

食事作りも大変な仕事でした。朝など、五升炊きの大きな釜に昼の分までたくさん炊き出していました。また労働量も多いので、みんなよく食べたのだと思います。父なども、どんぶりのような大きな茶わんに三杯もおかわりしていたのが、子ども心に残っています。特に五月、六月は水田作業が始まり、苗代から田植え、田の草取りと、一方では養蚕も、春蚕、夏蚕と、猫や犬の手も借りたいくらいの忙しい日が続きます。



この時期になると、小、中学校は農事休暇（農繁休暇ともいう）に入り、子どもも大人も総出で家の仕事をします。この休業は、年に秋と二回あるのです。

子どもたちは、ここでよく働きます。もちろん、遊びざかりの子どもたちにとつて、この手伝いは決して楽なものではなく、苦痛なものであったと思います。私自身、こんな蚕なんか飼わなければいいのにと思うこともありました。それでも今、この頃のことを思うと、苦しかったことより、懐かしい思い出一杯です。

外仕事の蚕の桑もぎ、何枚も何枚もある畑の草けずりや、夏の暑い日の田の草とり、二頭もいた馬の餌の草刈り、二キロも三キロもある山道を、桑を背負って家まで運ぶ手伝いのほかに、内仕事として、夜には蚕に桑をあげる「桑くれ」という仕事がありました。

また母や姉が忙しい時は、七、八百メートルもある山道を、何回も登り下りして手桶に飲み水を汲み、水がめのために仕事も私の日課の一つでした。肩に重い込むてんびん棒の両端につるした手桶の重さも、苦しいものでした。

その上、母や姉が、手が放せない時はお米を洗って

水を切り、そしてご飯を炊くこともしなければなりませんでした。

ある時、お米をといでご飯を炊いておくようにいわれ、「男がご飯を炊いたり、味噌汁をつくるなどおかしいよ。妹にやらせればいい」と文句をいったことがあります。その時、母は、「おまえが大きくなつて嫁さんをもらい、子どもが生まれ、もし嫁さんが病気にでもなったら、自分の子にひもじいおもいをさせ、しかも病気で寝ている女房におかゆ一つ作つてあげられないでどうするの。みんな大きくなつたら自分にかえてくることばかりだよ。いやいやながらしたことは、一つも身につかないのですよ」と諭し、ご飯の水加減も手をとつて教えてくれたものでした。

また味噌汁も「煮つまつた汁はおいしくないよ。煮干しで味をとつた鍋の湯がさつとわき立ったら、お味噌を入れ、野菜を入れなさい」と教えてくれました。かまどの火のもし方も、手にとるように教えられたのです。

こうした少年時代の手伝いの思い出は、今書き出すと限りなく、果てしないものがあります。一枚一枚、山の上の方の畑に向かって草けずりをしていく根気、

途中で投げ出したくなるつらさ。大きい畑の広いこと。長い一本一本の畝を見るたびに、痛くなった腰をのばして、私はため息をついたものです。

しかも自然は、決して私を甘やかしてはくれませんでした。少しでも手を抜こうと、畑の草をすみずみまで丹念にけずらずに、表面の土だけひっくり返しておくと、二、三日して行ってみると、きちんと仕事をしたところは草が枯れて畑がきれいになっているのに、手抜きやごまかしは、すぐばれてしまうのです。少年の私の心に、こうした自然は仕事への誠を教えてくれました。

また、そうしていいいに仕上げたあとには、一本の草も育たないことを自分の眼でたしかめ得た時の私の喜びは、何ものにもかけがえないものでした。

そうしたお手伝いの仕事を通して、私は、父や母が働くことの苦勞への思いやりを持つことができたのです。また、姉や妹に手伝ってもらって早く自分のノルマが達せられた時などには、協力に対して感謝することを知りました。

一粒のお米も百日たたないと食べられないことを知

り、一かぶの大根にも、何十日かの汗と苦勞がにじんでいることを知り、無駄をしてはいけないということを感じました。

「豊かさの中の心の貧しさ」が、今の社会の中で一番悲しいことです。お金さえもつていけば、すぐ何でも買える。そしてそのお金すら、親は気軽に子どもたちと与えている。このことが、今の子どもを心貧しいものにしていくのです。

私は今でも、亡き父と母を尊敬しています。私に、生きることにへの望みを、持続への忍耐を、そしてそれを成し得た成功への喜びを、責任を果たすことへの意志を、そして人間が一生懸命に生きることの美しさを、手伝いを通して教えてくれたからです。教科書にもないことを、お手伝いを通して、かけがえない体験を通して私は知り得たのです。

私は今、一人の娘をもっています。その娘に、できるだけこの尊さを体験してもらおうよう、心がけています。その過程では、失敗もあります。しかしその失敗も、手伝わせる娘のもどかしさ、まづさの中にも、娘が何かをつかんでくれればいいと思っています。「失敗」

——そこに、次への意欲を生み出す動機がある、と私は考えます。

子どもの自主性は、自分の意志と身体で何事も試してみようという自由によつて裏づけられています。人間、幼い頃、一度ならず何度も、自らを試してみようという無意識の意志が働くものです。

指示されたことしかししない。できないという枠の中にいる子どもは、指示を失うと、自ら進んで道を開こうとしないし、そうした意欲さえ示してくれません。

私は、自らの少年時代を顧みて、父や母が私に与えてくれた仕事の中で多くを学び、多くを身につけ、生きることへの幸福感を得ることができたと思っています。そして、多くの哲人が残してくれたことををかみしめているのです。

「勤労は、徳に向かう一つの衝動である」(カント)。

「勤労の喜びは、経験から生ずるものであって、説教から生ずるものでない」(カール・ヒルティ)。

●出典「育てる」通巻176号 昭和58(1983)年2月25日発行

働くことは楽しいこと

——「おせっかい」こそわが人生——

牧野 操 (豊昭学園 教諭)

「働くこと」が休息なんです

数年前「育てる会」の指導者だったK君は、今、国立病院の内科の先生です。K君が大学生の時、夏行事の燕登山で知り合い、それ以来ずっとおつきあいが続いています。先日、彼が自宅に遊びにきくれた時のこと。いつも何かやっていて落ち着いていない私に、常日頃不満をもっているらしい家内が、まじめな顔をして医師であるK君に、

「身体を動かすことは大切でしょうけど、時にはぼんやりしていることも大切なんでしょう。私は休息が必要だと思うけど医学的にはどうなんでしょう？」と、まるで私に忠告してくれと言わんばかりの質問をした。ところがK君は自信をもって、

「確かに休息は必要ですが、働くことそのものが休息だという人もいます。よく食べてよく眠れば心配あ

りません。むしろ無理して休まなければならないと思うことの方が、害が大きいんです」と言った。

私、思わずにつこり。家内は不満顔。そして私はさっそく外に出で、車の掃除をし、バイクのオイルを交換し、ついでに物置の整理をしたのです。

「不安」を感じながらも

私は生まれつきじつとしていられない「タイプ」で、何かと口出しをし、手を出してしまうのです。もちろん損得に関係ありません。

「牧野さん、相談にのってほしいけど……」

「お金以外のことならね」

なんてことは、いつものことです。今年で八年目に入った地域の少年野球チームの父母の皆さんから、野球に関係ない相談も一つ二つではありません。

「ウチの娘、来年高校受験なの。頼むよ」

「じゃ、ウチにつれてきなよ。明日」

そして次の日から受験勉強のお手伝いをする事になったのです。

「そんなに簡単に引き受けて、もし受からなかったら

どうするの？」と家内に言われて、はじめて「えらいことになったなア」と気がつくのですが、断ることもできず、「発表」の日までおつき合います。

「失敗したらどうしようか」と不安を感じながら——。でも「うまくいく」可能性も半分はあるのですから、がんばってやれるのです。もちろん最初からそんなことを計算しているわけではないし、「頼まれた」ということに「よろこび」を感じて「お手伝い」をしているのです。それが大きな力でなくても「必要」としてくれるとすれば、やはり「よろこぶべきこと」と思います。

少年野球チームのこと

ふとしたことから少年野球チームを結成して八年目になります。結成以来、運営面でも、成績の面でも思うようになりませんでした。昨年ようやく市の大会で優勝しました。もちろん選手の子どもたちががんばったのが一番の要因ですが、数年前私なりの工夫もし、努力もしたつもりです。

「牧野さん、市議選に出るらしいよ」

「塾を始める準備じゃない？」

「今どき、タダで子どもの面倒見る人なんていないよ。スポーツ用具売るつもりよ、きつと」なんて、もつもらしいウワサが流れたこともありましたが、私は気にせず「その時はよろしく」なんて笑って過ごしてきました。はじめての抽選会に出席して、他のチームの皆さんが、いかに情熱をもつてやっているかを知った時、「俺も負けないぞ、少し慣れたら、本部の手伝いもしなくては」と思ったのです。そして三年目、とうとう「役員」を引き受けてしまったのです。立候補して役員になったのではありませんが、つい一生懸命になつてしまい、今年もまた役員をやめられそうありません。家内は言うのです。「そろそろやめてもいいんじゃない? ウチにだって子どもがいるのよ」と。

そして私は「そうだよなア。でも他にだれも引き受けてくれないんだよ。こんな筈ではなかったのになア」と言いながらも、続けてしまうのです。

トラックのこと

この話をするとき笑われますが、数年前、トラックが近所の農道に迷い込み、運転手が一人で困っていました。

ちょうど家の窓から見えたのですが、「あのやり方では出られないな」なんて思っていたところ家内がやってきて、「気になるんでしょ、行つてあげなさいよ」と声をかけたのです。私は何だか急にうれしくなつて、走つて行きました。家内に言わせると、その時の私は「ここにこして」いたそうです。現場に着くと運転手と、お手伝いの私の立場がいつのまにか逆になつてしまい、「あんた、あそこの古いタタミを運びなさいよ」なんて命令していたのです。もつとも運転手の方も、素直に「ハイッ、何枚運べばいいんですか」なんて質問するものだから「二枚あればいいよ」なんて、ごく自然に口から出てしまいました。こうしてトラックは無事脱出に成功したのです。

私は「困っている人を助けてあげた」と思つてはいません。もちろん「何らかのお礼」を期待していたつもりではありません。「きつと、あの人も、このできごとを忘れられないだろうなあ」と思うだけで、何故か私はうれしくなるのです。

陸上部のこと

私の勤めている高校のクラブ活動の一つである陸上

競技部にも、夢中になったことがあります。はじめて教員になって、はじめてのクラスにS君がいて、駅伝に出場するからマイクロバスを運転して欲しいと言われ、応援がてら出かけたのがきっかけでした。

十一月初旬なのに確か小雪がちらついていました。八王子の郊外で、一本のタスキのために、ひたすら走る若者たちを見て、たちまち感動してしまいました。百三十校中十位でした。生徒によると、優勝すれば全国大会へ、六位入賞なら関東大会への出場資格が得られるとのこと。

「そうか、じゃオレが面倒みてやろうじゃないか」、そして次の日から陸上競技部を引き受けたのです。といっても自分は選手の経験はもちろん、陸上にどんな種目があるのかも知らない位でした。

部員に教えてもらったり、本を読んでみたり、他校の先生の指導も受けました。その中から、高校のクラブ活動では専門知識がなくても、情熱があれば、ある程度の成果が得られることを学びました。秋から冬の間はグラウンドの日暮れは早く、懐中電灯のものでストップウォッチを読まなければなりませんでした。

職員会議はよく欠席しましたので、「牧野先生、いつから体育の先生になったの？」なんて言われたこともありました。今、ふりかえってみると、当時はやはり「若さ」があつたのでしょう。がむしやらに生徒たちにつき合い、数年後関東大会に出場し、個人種目ではありましたが東京代表として国体に出られる選手も育てくれたのです。現在は他の先生が担当していますが、当時の子どもたちとはいまなお、お付き合いをしています。中学でも高校でもほとんどの学校がそうだと思いますが、クラブ活動を担当する先生は少なくなっているようです。何らの手当もなく、ミスがあれば、その責任は問われるといった現状では、逃げ出したくなるのもわからないではありませんが、情熱をもってすれば、きつとそこには「よろこび」がうまれる筈だと思います。この陸上競技でも、私は生徒を指導したとか、育てたとは思っていません。私自身が楽しくやれたのですから。

自分でも解らない

私のこの人一倍「おせっかい」な性格は、生まれつ

きのものなのか、両親にそのように育てられたのか、自分でも解りません。農家の次男として生まれ、妹の子守りをし、田植えも、稲刈りも、草刈りも、そして山仕事も当然と思いながらやって育ってきた私は、両親の生き方が自然に身についてしまったのかも知れません。母親は「どうせお前はいつか他人様の飯を食うのだから」と常に言っていたことは今も覚えています。色々まわり道をしながらも若者たちと付き合うようになつた今、「おせっかいな私」に育ててくれた両親には感謝しています。

もちろん、ここまでやってくるには、両親ばかりではなく、多くの方々の助けも、後押しも受けて、感謝せずにはいられません。その恩返しの一部と考えて、私を必要とする人々にはできる限りのことをしてあげたいと思います。それが引越しの手伝いであっても、受験相談であっても、車を引き出すことであっても。

もう一度同じ道を歩いてもいい
私は大学の卒業の時、お世話になつた先生がおつしやつたことばを今も忘れません。

「君たちが高校生に英語を教えるなんて思うな。英語は嫌いだけど、英語の先生は好きだ、と言われる教師になれ」と。そして私はそのように心がけて今日までやってきましたし、これからもやっていくつもりです。「オレから英語を学ぼうと思うな。オレの生き方を知ってくれ」と言い続けながら。

四十歳を過ぎた今、自分の歩んできた道をふりかえってみることも多くなりましたが、私はその度に、「同じ道をもう一度歩いてもいいなア」と思えるのです。高校生を見ていても「輝いた目」をした者が何と少ないことよ。高校生になつてどんなに説教しても、遅いのかも知れませんが。親の生き方を学べと言つていても、この時代では無理なのかもしれません。八坂村の行事でほんの少しでもいい「物を作るよろこび」とか、「働くよろこび」を知ってくれたら……。

くやしい時には怒り、悲しい時には泣き、そしてうれしい時には大声で笑えるような人生を今まで歩いてこられたのは、「おせっかい」が基になっているような気がするのです。

再掲載を受けて――

働く体験を繰り返すことで得る学び

戸田 佐和子（現・山村留学指導員）

召田照明さんが書かれた『人間の成長とお手伝いの意味――少年時代の思い出から――』の再掲記事を読み、共感した。学園生たちに、提供する「働く」体験を通して、身につけたり培ったりしてほしいと私がぼんやりと願っていることを言語化していただいたような気がします、すつきりした。ここでは、集団生活や活動の中で学園生たちが「働くということ」について書くと思う。

私が思い浮かべる、山村留學生たちが働く場面というのは、農作業や奉仕作業、一般家庭でいうところの家事労働のお手伝いといったことだ。但し山村留學生生活では、家事労働はお手伝いではない。片づけや洗濯の一連の流れ等自分のことは自分ですることになっているし、食事の台拭きや配膳、各所の掃除等は分担している。当番制の動植物の世話や係の仕事等も然り。誰かが請け負わ

なければ、忽ち生活に支障をきたすので、やらなければならないこととして子どもたちに定着していると思う。

一方で、子どもたちが働くイメージの活動を挙げると、厳しい労働の体験を目標にする、鍬を使った田畑起こしや足踏みによる代かき、手による田畑の草とり、鎌による手刈りでの稲刈り等の農作業や、やり遂げる労働体験に加え奉仕や協力の体験を狙いとする、きのこの植菌、味噌作り、青菜の保存食作り、大掃除等になる。

要するに私は、日常生活の中でやらなければならないことや、辛苦したり、同じ作業が続き根気が要ったりすることを伴う作業に子どもたちが取り組んでいる時を「働く」場面と見なしていて、学園生たちは働かざるを得ない環境に置かれていると言える。それは、召田さんが子どもの頃にしていた家の仕事やお手伝いに相通ずる部分もある。蚕の桑もぎや馬の餌の草刈りと同じ趣旨の、冬に備えて総動員で行う、学園で飼っている山羊の桑や葛の葉等餌集めも、もはや秋の風物詩になっており、学園生の仕事と位置付けられている。

召田さんの少年時代と現学園生たちの、仕事量と働きぶりを単純に比較することはできないが、足元にも及ば

ないだろう。過酷さの次元が違うし、学園生たちの場合は人数も多く、あくまでも体験の範疇だからだ。それでも、それらの活動中、使役させられているように感じたり、さぼったりする子は一定数いるものだ。

例えば、しゃがんでひたすら雑草を摘み、根こそぎ抜いていくだけの畑の草とり。厳しい気象条件のときはあるが、年端もいかない子にとっても、作業自体は決して難しいものではない。目の色を変えて雑草を抜きながらふと視線をあげると、いつ見ても突っ立っていたり、座り込んでいたり、口ばかり動かしたりしている子たちの姿が視界に入ってくる。なぜ雑草を抜かないのか理解に苦しむ。手を動かさず、肝心の草とりが疎かになっているから、私は厳しく注意する。鬼軍曹よろしく「働け！ 働け！」と言ったり、働かざる者食うべからずという慣用句が頭の中で渦巻いたりもする。

雑草を根こそぎ抜いてさえいれば、痛くなる腰や膝を時々伸ばしたり、適宜休憩をとったり、多少の私語は容認したりしているつもりだ。草とりは結果が目に見え、達成感を味わうこともでき、手抜きやごまかしは後に露見するので、仕事に対する誠実さというものを学ぶこと

もできる作業だと思うが、怠ける子は怠ける。声を荒らげて注意しても、根気がないのか、体勢の辛さに耐えられないのか、責任感のなさなのか、態度は一向に変わらない。働かない子は、多分やらされ感満載で、自分に関係のあることではなく、あたかも私のお手伝いをしているかのような感覚なのだろうと思う。しかし、本当に感心するような働きぶりの子もいるので、何が違うのだろうと考えている。

とにかく、子どもたちには労働の体験を提供し続けようと思う。働く体験を繰り返し繰り返すことで得る学びがあり、その後の生き方にも良い影響を与えてくれるはずだ。体を動かし頭を使つて働くことで、自ら段取りを考えたり効率を考え工夫したりするようになり、自主性を育み、自尊心を高めることにも繋がる。任せられれば、責任を持つようになつたり、物事を断片的ではなく流れとして捉えたりするようになる。やがて社会に出て、誰かのために働くという意識を持つことにも繋がり、ひいては良好な人間関係を築けるようになり人生が豊かになると信じてやまないからだ。